

浄春院

寺号 曹洞宗不二山浄春院

本尊 釈迦牟尼佛

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、禅宗曹洞派、常陸国行方郡上戸村長国寺末、土峯山と号す。開山梅室門英、開基一色宮内大輔公保、寛正五年【一、四六四】二月十七日卒す、公保の事幸手宿の條に委し、慶安元年【一、六四八】九月寺領十石の御朱印を賜ふ、本尊釈迦を安置す、鐘楼近き年鑄造の鐘をかく、浅間社・地藏堂。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「浄春院」村の西北にあり、曹洞宗常陸国行方郡上戸村長国寺の末派なり。開山梅室門英開基一色宮内大輔公保寛正五年二月十七日卒す。【風土記】と記されている。

『寺の伝記』 「一」

一色氏については、『新編武蔵風土記稿』の中で、幸手宿の項に城蹟として、記載されている事項は次の通り。一色氏は小名牛村にあり、字城山と号すれど、もとより古利根川を要害にあてし城にて、平城なり、何時の頃よりか畑となり、堀土居等の跡も失ひ、享保十九年【一、七三四】より年貢地となり、宿内寶藏寺及び名主右馬之助か家記、且上川崎村の民伝右衛門が所持の系図に由れば、足利宮内少輔泰氏の子宮内卿公保、始て三河国幡豆郡吉良庄一色に住し在名を以て一色と称す、子孫宮内大輔直朝は足利晴氏義氏に従ひ、当所に居城せしが、義氏落去し直朝関宿宿の城主某に攻められ、利を失て落城し、下総国大淵寺に引籠れりと、其子宮内義直も同く隠棲せしが、直朝没後義直東照宮に謁し奉り、禄を賜ふとのす、按に当寺関宿宿の城主は、古河公方の老臣築田氏なり、一色氏と合戦に及ぶべき

の理なし、思ふに天正十八年【一、五九〇】小田原陣の時退去して、当城
廃せしなるべし、又村民の伝に東照宮の小山御出陣のとき、一色父子糟壁
邊まで出迎奉りければ、直に子息を御陣の御供に召連られ、其後関ヶ原御
凱陣の後召出され、旧領なれば此邊七千石の地を賜ふと云、是によれば御
迎に出でたるは直朝義直父子にして、義直召し出されしなるべし、又一色
家系に、宮内卿公深が曾孫より七郎藤長まで代々足利將軍家に従ひ、太閤
及東照宮より御書等を賜ひ、子孫御旗下の士となり、今に連綿せりとのす、
又別系に宮内大輔直明を始として記し、直明の孫義直、御当家に召出され
しよしを載す、是によれば此時二家なりしなり、当城初築の年代を考ふる
に、名主右馬之助が家記には、宮内大輔直朝が居城せしよし見えたれば、
直朝が始て築し如くなれど、一色建立の寺社と云もの、村内寶持寺及び天
神嶋村天神社の外にも数カ所、直朝より舊く先代に建立せしもの見ゆれば、

直朝以前居城せしことしらる。と記されている。又寶持寺の由来の中に、田圃の中に雷電の御神体が立ちいるを見て村民が奇異の思いをなし、この地に宮を建立したが、田圃の中で付近に民家もなく人々は田の中の宮と云、地名が田宮庄、薩手【幸手】と称したと伝えられている。

◎筆者【須賀】の推定では、一色氏は幸手領の城主であった時に、この文中に糟壁邊まで東照宮を御出迎へしたとあるので、小淵は幸手領内であったところから、一色氏が浄春院の開基となって建立されたものと思考される。

「二」

開山梅室門英大和尚は、永平寺の道元禅師より十五代の僧である。この寺の由緒については、廿五世の時代に火災により一切の記録も焼失してしまった。但し貞享五年【一、六八八】の当寺九世高遠宅道師の時代、不動

院に関する訴訟の裁許状と梵鐘の銘文及び

徳川家茂公の御朱印状が残されている。

廿九世勅特賜大陽眞鑑禪師穆英石禪和尚の記録によって察するに、富士浅間を勧請した。当時幸手領主一色家の俗縁によって奥州岩城領浄春院に住職であったが、その後退隠して此地に錫をとどめ四万坪の寄進を得て土峯山浄春院とし自ら開山となられたとある。七世天室秀梵の時代、貞享以後元禄年中迄、三十名の住錫、八百余の檀徒を有し、十一世天瑞の代正徳年間には、十五・六名が常住していたとある。

八世泰岩秀宅の時堂宇を再建し、九世高遠宅道が梵鐘が遠くまで聞こえないので、天和二年に再鑄造した。なお宝暦九年秋、火災により堂宇が全焼し、明和五年、十六世祖透智憲師が再度鑄造したが今次の大戦に供出し、近年になって白鳳師の代、新たに鑄造して現在の鐘を掛ける。

「三」

この寺は、江戸幕府より寺領十石を賜る。御朱印状の一部が保存されている。

「四」

近年になって白鳳師の代に、境内左側に座禅道場が新築され多くの参加者が修行されている。

「五」

当寺十一世の天瑞通和尚の時、随意会地の格地に列せられた。又宝暦九年と安政四年の二度の火災により寺運が衰微したが、第廿七世中興鐵眞如禅が文久三年五月晦日に、現在の法堂を上棟し寺を再興した。その後石禅禅師以下沢山の哲匠を輩出し寺運も隆盛し現在に到っている。

◎註「二」の文中に不動院に関する訴訟の裁許状とあるのは、次の事情によ

る訴訟である。

時代の考証は不明であるが、不動院野の当時の住職は水戸光圀の娘、みで浄春という人であった。この人が時の幕府の権威を基に浄春院の名称で浄春という人であった。この人が時の幕府の権威を基に浄春院の名称ると訴訟を起こしたという。しかし寺の名称は開山以来の寺号であり、により仲裁されて、幕府から寺号が正しいという裁許状が寺に送付され状が寺に残されている。

『寺の宝』

不動院に関する訴訟の裁判、結果の裁許状

不二山浄春院記録【廿七世如禅師・廿九世石禅師両師の伝記等が記録されている。】

鎮守百余尊縁起書

円空仏【不動明王像】

その他

位牌堂 市内の寺院の中でこの寺の位牌堂は、特別な趣きを持った施設である。

観音堂 十一面観音菩薩を安置

薬師堂 薬師如来菩薩像木像を安置

稻荷社 この社は、本来は本堂内陣に安置されていたが、近年になって本堂の裏に

建立された。枳殻天社【豊川稻荷大明神】という。

仲藏院

寺号 真言宗智山派神林山仲藏院

本尊 正觀音像木像 作者年代不詳

脇仏 弘法大師像 作者年代不詳

興業大師像 作者年代不詳

十一面觀世音像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、埼玉郡粕壁宿最勝院末、神林山と号す。本尊正観音を安ず、中興開山賢弘、慶安三年【一、六五〇】遷化、法流開山寛傳安永六年【一、七七七】九月寂。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「仲藏院」村の南方にあり、新義真言宗埼玉郡粕壁宿最勝院末派なり。○中興開山賢弘慶安三年遷化法流開山寛傳安永六年九月寂す【風土記】と記されている。

『寺の伝記』 「一」

平原寛空和尚より筆者がご教授頂いた「仲藏院」の由緒を要約すると、次のとおりであるが、内容に聞き違いの事項もあると思われるが、年月も経っているので誤りのあることは、寛容にご理解されたい。

この寺は、権大僧都秀宥和尚が、永禄年間に開基され、建立されたと伝

えられている。しかし、宝永年間に火災にあい全部焼失してしまったので、記録文献等も消滅して、当時の状況は不詳である。幸いに慶安三年正月九日に寂された、権大僧都賢弘和尚からの石塔が境内に現存しているので、歴代和尚の概略は察知できる。

「二」

この寺の本尊は本来は、十一面観世音菩薩にして、恵心僧都の彫刻せし、豊作・子育ての尊像であるという。この尊像は寺の秘仏として大切にし、位牌堂の中に安置されている。

「三」

天保八年八月十九日示寂された権大僧都傳應和尚の書せし文書が保存されている。

伝応和尚寄附岱長台帳の序文

当院本尊十一面觀世音菩薩は、恵心僧都の彫刻にして豊作子育の尊像なり、然るに去

る宝永の頃、本堂・庫裡残らず焼失して、假堂を営み其後歴代の院主造立の望これあ

りしもその志を遂げず徒らに星霜を経し処、頃年漸く破壊に及ぶ。拙住其の志願有り

といへども止事を得ず因て総列、成田山に運び再建成就の祈願誠心を尽くせし処明王

の靈瑞を蒙り、亦幸いに里中の皈依を受く、故に今発願すといへとも檀家小村の力に

及すところなく、他の助力を求む、衆は即ち年来の志情を憐み且は徳本を植るの意有

之結縁の為多少に限らず寄附あらば、慈眼視衆生福聚海無量の誓ひ空
からず、猶院内

に於て、家運長久如意安全の旨勤行致すべきと云々。

文化十二年九月 仲藏院現住 傳應

◎註 伝応和尚は、藤塚村の時田家の出身にて、仲藏院の十世住職となるや、

他から宝永

年間に焼失して仮堂であったものを、再建を発願し総代と相謀り千葉

の成田山に参

拝して祈願をこめたりという。寺の中興の祖ともいふべき和尚にして、

齡七十歳八

月十九日示寂

『寺の宝』

観世音菩薩像【秘仏】 恵心僧都作

芭蕉翁の書簡【原文】

御文被下殊に何寄之一品誠に御厚志之所察入候且又集会之事も当月中に被成候由可然候万一無抛用事御座候はば連名の所まで此通り御書可被候下候

木こがくれて 茶摘ちやつみもきくや郭公ほととぎす

何も間日候万々申越候其角子も昨日帰候 右の通り御斗申べく候

四月十二日 樵月舎御僧

◎寛円和尚は宗匠として知られる人、書画・骨董に興味を持ち多くの人々と親交があり、

芭蕉翁とも俳句で交わり名を樵月舎という。

その他

明治十九年四月、牛島・文友・小淵の三校を合併して、八丁目仲藏院に

八丁目聯合学校を開設して、牛島村に分校を置く。

東福寺

寺号 真言宗智山派菩提山正向院東福寺

本尊 阿弥陀如来木像 行基作

脇仏 弘法大師像 向島近藤弥治衛門寄進【明治元年】

興行大師像 同じく

良伝僧都坐像

東福寺再建者

薬師如来像

宝藏寺より合祀

十二神將軍像

同じく

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、埼玉郡粕壁宿最勝院末、菩提山と号す。本尊阿弥陀、行基の作と云、中興開山元春貞享三年【一、六八七】遷化、法流の祖祐尊宝暦七年【一、七五八】二月十七日寂。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「東福寺」村の南方民有地にあり新義真言宗埼玉郡粕壁宿最勝院の末派なり、○中興開山元春貞享三年三月遷化法流の祖宝暦七年二月十七日寂す。【風土記】と記されている。

『寺の伝記』 「一」

慶長五年十月付で、武蔵国勝鹿郡八丁目住人東覚坊末孫道香が書せし縁起書がある。阿弥陀如来の尊像をたずぬるに親鸞聖人三十五歳の御年、越後国に御流刑の御身とならせられ、五ヶ年間御化導あらせられ、それより常陸国笠間の郡稲田という所に久らし移させ給いしに、さびしく暮らすといへども道俗跡を訪ね法筵招かずとも貴踐場に集まり仏法弘通の本懐ここに成就し、衆生濟度の宿願忽ち満足す。聖人のお教えを受けるともがら専ら如来の本願に帰入し、念仏安心のおもむきを極むる人、併るに昔袁の行者の流れを汲む修験道の棟梁たるものにて、備前の僧都義直坊弁鸞と申す山伏あり、常に聖人の正法を妨げん事を好み或時密かに聖人を害し奉らんとて、尊願に向へば正法の有難き事を聴聞し、害意忽ち消滅して、あら恐ろしのがみかなと、先非後悔の涙にむせび一念得度して、柿の衣に身を改め聖人の御弟子となり、法名を明信房とたまわり明け暮れ給仕し奉り念

仏往生の御教訓を蒙る。

その後聖人関東御化尊の砌り武蔵国勝鹿の郡なりたる頃五月雨降る吾妻路に宿を乞わんと祈りしもよしや、幸手なる八丁目の里に着き給へど、土民御宿申さざればつれなく夕暮れせまる武蔵野にて一夜を明させ給うところ、仮り寝せん旅の墨染めぬれて暗きたそがれにて、ここかしこ訪ね給うに柴の庵にかすかなる灯ありけるを、いざ立ちよって問い給うに、備前の国弁燕の末派東覚坊と名乗りし山伏の住家にありにけり。東覚坊もかねてより貴聖の御身なれば竹の庵の席にいざない御宿申し奉りしに、終夜生死無常のありさま造悪不善の凡夫、六趣四生の内ならで趣くべき方もなき身なるを、如来願力の不思議にぐうすれば速やかに極楽往生とぐるものなりと、ねんごろに仏道修行の御教化ありければ、本覚も仏恩の深重なること、ありがたく思い、聖人を崇敬し奉り御教化の衣にすぎり、御別れおしとい

へども東覚坊せんかたなく、深くお名残り慕いければ聖人も賢くお思召され、御形見に阿弥陀如来の尊像を画き授けたまへば、本覚坊も歡喜礼拝して供養し奉り、秘藏して本覚坊の後胤に永く伝えさせ給う。即ちこの如来像なり。

その後如来を納め奉らんがために一字の坊舎を建立し、唯一筋の菩提を願うためなれば菩提山東福寺を名附聖人の御筆染めたもう正向の阿弥陀尊なれば、院号を正向院と称し久しく聖人の御旧跡たれと因ししところ、慶長年中はからざる火災にかかり、仏殿をはじめ諸造を残らず焼失せるに、この如来を梵焼し奉りことを諸人いたくなげき、焼け跡の灰かきならしけるに、この尊影いつとはなしに独り火中より出現して、山門のかたはらなる松の古木その西にさしたるこずえに、此の一軸かからせ赫々として光明を放ち給うを諸人これを伏しおがみ不思議の思ひなし、それより里人靈筆

の仏徳を敬賛して、火中出現の如来と称し奉る。そのかからせ給う松を「みだかかりの松」と唱えけるに、西にさしたる枝自然と靈樹の形を造りしかば、聖人の旧跡を訪ぬる人々遠近をとはず訪ね来たり拝み奉り神変不思議の功德を知らるなり。その頃何処からともなく一人の女性来たりて聖人の御真筆の如来像を拝みたき由、申しければ即ち拝さしむるに歡喜涙を袖につつみ余念なく合唱礼拝して立ち去りける。容儀あたかも神女の粧をふくみければ住僧これよくつねならむ人と思ひひそかに門外を見送りしに、念仏の声もろともに、にわか立ちいずる靈香四方に薫じ称名空に聞ゆると思うに忽ちかき消えるごとくに見えて失せり。ここに住僧あら不思議かなと驚嘆して思ひけるは、これ正しく神明天神の方便に女形を表わし来たり如来を拝したものにありけると、うわさ近隣にいたり、たた希有のおもいをなし、いよいよわれ人信心を生ず、又難病の流行することありて、そ

の病の甚だしきに至り、又難産の及ばざるには、この如来の御影をうつし
給える水を与えければ速やかに病苦を除き難産つつがなく出生するなり。
実に救誓大悲の巨益いかでかならんや。渴仰随喜のともがら心命をなげう
ち来世に生まれ罪深きわれわら仏恩のかしこきことを仰ぎ信心をこらし拝
すべしとは臨終の夕には早く来迎ましまして大悲与願のみ手を伸させ安養
浄土へ導きたもうなり、誠に御真筆火中出現の如来と称し、一度拝すると
もがらは永く一蓮同生のちぎりを得さしめ給うこと疑いあるべからず、有
信の貴践男女へ結縁弘通のため略して靈画の由緒を云々

慶長五年十月 武蔵国勝鹿郡八丁目

住人東覚坊末孫 道香謹書

◎註 右の由来書を解説して感ずるにこの寺は元は修験宗で、親鸞聖人の教
訓を受けて弟

の末派となつ

子となり、浄土真宗の寺を創立して、後に新義真言宗粕壁宿の最勝院
たことが推定できる。【真言宗については、最勝院と玉藏院の事項で

記述】

「二」

寺院の本堂建立勸化帳【木版】に次のように書かれている。

夫当寺本尊阿弥陀如来は行基菩薩の御作なり、その昔本願開祖親鸞上人
関東下向のみぎり一宿したしく正向の阿弥陀を画き当山に残し給ひしより
院号は正向院と号す。

時に百五十余年以前に本堂焼失の砌りこの画像自から飛行して松の枝に
かかり給えりと云、いづれも靈験あらたかなる本尊なり、しかるに本堂大
破におよび多年建立を願うといへども貧窮無福にして自力にかなわず、こ

こによつて十方檀越へ十万人講をもとめ助力を願うものなり、伏して乞う有縁無縁の道俗男女、一紙半銭の旅人の功積りて阿弥陀如来の本堂成就せば、大悲大悲の方便空からず、現世安穩当来には安養浄土一蓮託生の身とならば小間大界の大幸なりしという云々。

武州葛飾郡 幸手領八丁目村

宝暦九年卯四月 真言宗菩提山東福寺

『石仏』「一」

良傳僧都の墓：不動尊として祀る【一名みみだれ地蔵尊という。】

この石仏は中興開山良伝【東福寺・宝蔵寺を再建した和尚】入寂の日【明和三年〇月二十八日】は、不動尊の縁日に当たるところから、石塔に不動尊を刻み祀ったもので、耳の病を直す不動と伝えられている。

「二」

青面金剛

【道標：樋を渡り左宝珠花。此方か寿壁道】

青面金剛

【道標：右此方行留り・左此方宝珠花金野井】

新阿弥陀四番

本尊行基御作 寒念仏講

靈宝正向阿弥陀如来

親鸞聖人御筆

『寺の宝』

阿弥陀如来尊像

行基作

延宝九年

眞鸞聖人直筆

阿弥陀如来画像

薬師如来尊像・日光菩薩・月光菩薩・十二神将像

不動明王並び二神

般若十六善神 画像

愛染明王

画像

宇賀神

画像

閻魔大王 画像：胡川永久筆

脱衣姿 画像：胡川永久筆

版木 正向院を証する

眞鸞聖人説法の板絵

算額 近世算術近道：栗原伝三郎

「古文書」

東福寺什物記【各種記録を一冊に：明治十五年】

東福寺再建古証四通【一幅に調整】

眞鸞聖人 縁起録 一卷

住職所蔵の宝【古文書】

承和四年仏書手記一卷・貞観二年仏書手記一卷・治承三年仏書手記一卷・

承元元年仏書手記一卷・文永五年仏書手記一卷・延文二年仏書手記一卷・

天正二年仏書手記一卷・慶安元年仏書手記一卷・各仏書手記 約二百冊
住職所蔵の宝【版本】

座右書札【寛永十年版】・袖王武鑑【天保十一年版】庭訓往来【安政二年
版】

三故指帰文筆【寛文七年版】・京羽二重大全【延享二年版】武江披沙外編
【寛政亥丑版】・春秋左氏傳【天保二年版】・小学合璧四卷【万延庚申版】
外百五十冊

その他

境内の中程左側に「弥陀かかりの松」の跡がある。今は変わりに植えら
れた小松。

本堂の左裏に近年建立された大師堂があり、中に四国四十四ヶ所の仏像
と現地の土の入った布袋が納められている。

寶光院

寺号 真言宗智山派山王山寶光院

本尊 胎藏界大日如来像 作者年代不詳

脇仏 弘法大師像 作者年代不詳

興行大師像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、埼玉郡糟壁宿最勝院末山王山と号す。本尊不動、鐘楼宝暦年中の鐘銘あり。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「寶光院」村の中央にあり、新義真言宗埼玉郡粕壁宿最勝院の末派なり。と記されている。この寺の開山・開祖については、記述がない。

『寺の伝記』

明治十年に火災により寺が焼失したので、記録がないが、寺の本尊で厨子入りの大日如来坐像についての由緒が記されている。それによると元禄元年に幕府から境内を賜り、本堂及び庫裡を創建したとある。開山は、法印宥巖と伝えられている。

その他

現在の藤花園は宝光院の隠居寺で、蓮花院があつた場所である。園内に数個の石仏が存在している。

明治六年七月、藤塚村・銚子口村・赤沼村の三ヶ村を分離して周知学校を設立したので、牛島村・樋堀村・樋籠村・新川村・不動院野村が聯合して牛島学校を設立し、校舎は宝光院を使用した。

無量院

寺号 真言宗智山派 香林山無量院

本尊 阿弥陀如来像 作者年代不詳

脇仏 弘法大師像 作者年代不詳

興業大師像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土紀稿』には、新義真言宗、埼玉郡粕壁宿最勝院末、香林山と号す。本尊阿弥陀、不動堂。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「無量院」新川村の中央にあり、新義真言宗山城

国醍醐三宝院の末派なり、埼玉郡粕壁宿最勝院末香林山と号す。と記されている。

◎両資料共開山・開基については、記載がない。

『寺の伝記』

故老の言伝えによると、この寺は昔、新川の開鑿以前は今の新川の辺りに庵があり、下柳村の土地に属していたようだという。新川の付け替えにより墓地の所在する現在の土地に本堂を創建したと伝えられている。

◎明治二十七年十二月、宝光院十四世住職日下浄晃師と十五世高橋見道師が無量院の住職を兼務していた。

◎床井智映師は、昭和十一年から无量院の住職に就任した。

その他

六十六部の碑

不動堂 不動明王像安置

観音院

寺号 修験宗小淵山正賢寺観音院

本尊 正観世音菩薩木像 作者不詳、年代は飛鳥時代と伝えられている。

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、本山派修験、京都聖護院末安永二年正月行事職を許さる、小淵山正賢寺と号す。本尊正観音、応安二年【一、三六九】住持玄通が書し縁起有に據は古き像なるべし、中興開山は尊慶と云、年代を知らず、仁王門・太師堂。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「観音院」小淵村の北方民有地にあり、天台宗近江国滋賀郡五別所村園城寺の末派なり、○本山派京都聖護院末安永二年正月行事職を許さる小淵山正賢寺と号す本尊正観音応安二年【一、三六九】住持玄通が書し縁起有に抛は古き像なるべし、中興開山は尊慶と云年代を知らず【風土記】と記されている。

『寺の伝記』 「一」

口碑によれば、正嘉二年【一、二五八】八月利根川【古利根川】氾濫の折、付近の里人が流木を薪にしようとして、斧を当てたところ稲妻が出て眼が眩みその場に倒れてしまったので、驚いて調べて見ると流木の中に仏像があつたので堂を建て安置した。永和二年【一、三七六】本堂を修理。元禄二年【一、六八九】山門建立。文政八年【一、八二五】本堂を修理と伝えられている。

「二」

昭和四十九年、筆者が当時の住職、故尾花三省師よりお聞きした口述によると、本尊正観世音菩薩は、昔、利根川の洪水でこの地に流れ着いたもので、村人が洪水に溺れそうになった時、この尊像に助けられたので、尊像を当時の村役の尾花家に祀ったが、この観世音菩薩像は現在の杉戸町方面から流出したものとわかり、元の地へお返ししたところ、その後又も洪水により尊像が流出して現在の春日部大橋付近の川岸で発見されたので、村人は「これは観音様がこの地に留まるご意思である」と悟り、尾花屋敷【現在の雪印食品工場内】に安置してお祀りしたという。【この場所を観音元屋敷と伝えられている。】以来観音信仰が始められた。観音院を建立して現在地に移れたのは、正嘉二年であると伝えられている。

「三」

小淵山正賢寺観音院は、承安元年【一、一七一】の創建で、開基当時は天台宗であったがその後、修験宗に改め室町時代に修験道のつし頭となっている。

「四」

小淵村には、修験宗で関東地方の大本山と云われた不動院が、この近くにあったが、明治初期の廃仏毀釈令によって廃寺となった。観音院は本来は不動院の客分の資格を有する寺であったが、観音信仰の霊場であったところから廃寺を免れ現在も修験宗の寺として市内に唯一残されている。

「五」

観音院では、六十年に一度の丙午の年に本尊の衣替えの行事が行なわれる。この行事は真夜中に灯火を消して真暗闇の本堂で厨子から尊像を出して、仏体を包む真菰を新規のものに取り替える儀式である。昭和四十一年

丙午の時に、尾花三省師の発案で昼間、この行事を執行。信者にも拝む機会を与えた。

「六」

尾花三省師が、某大学の教授に本尊を調査依頼したところ、尊像は非常に古い時代の仏像で、荒削りの木地観世音菩薩像であって、年代推定では飛鳥時代の作であると鑑定された。珍しい尊像であることが確認された。

「七」

この寺は、檀家が無く観音信仰によって維持されている寺で、毎年八月十日を四万六千日と称して例祭が行なわれている。戦前には、その年の嫁となった人達が花嫁姿で参詣したり、飾り付けをした馬を引いて参詣する習慣があった。

また、この観音様は別名『イボ取り観音』とも称され「イボ・コブ・ア

ザ」等をとる霊験があるとされ、信者は祭日までは初豆を食べない習慣がある。

『寺の宝』

一、仁王門【元禄二年建立：三間一戸楼門形式。春日部市有形文化財指定】

二、円空仏

聖観音像 一九六センチメートル【埼玉県内最大】

不動明王像 一三三センチメートル

毘沙門天像 一四七センチメートル

蔵王権現像 四〇センチメートル【全国唯一】

役行者像 三〇五センチメートル

徳夜叉明王像 三〇センチメートル

◎註 蔵王権現像については、東海女子短期大学教授土屋常義氏は、「円空
仏の信仰の根

源ともいうべき蔵王権現像は数多くあるべきであるが、春日部市の
観音院に唯一

体あるのみである。甚だ貴重な作品である。」と評価されている。

三、算学【八丁目の栗原伝三郎和算士が奉納した】

四、芭蕉の句碑【ものいへば 唇さみし 秋のかぜ】と刻まれている。

幸松地区の寺の概要

幸松地区には、近・現代になって創建された寺もあるが、ここでは省略する。

この地区には、江戸時代に存在していたが、明治初期の廃仏毀釈令・神仏分離令により修験宗の寺はこの法令により、無檀・無住また神仏混合の修験道の次の寺院は廃止された。

「不動院」【小淵】

『新編武蔵風土記稿』には、本山派修験、京都聖護院末、関東修験年行事職大先達なり、役流山と号す。本尊不動は役行者神変大菩薩のなた作りと称す、刀斧の痕凡作にあらざること知らる、開山直参法印秀圓天文十三

年【一、五四四】二月二十九日寂す。北条氏政其外古文書を蔵す、御入国の時も先例に依って年行事職元の如く命ぜられ、慶安元年【一、六四八】寺領百石の御朱印を附せらる。今も東照宮御下知状及御書を蔵せり、祖師堂・八幡社・天神社・愛宕社・山王社・稻荷社。と記されている。

「大乘院」 【不動院野】

新義真言宗、大塚村延命寺末、光剣山と号す。本尊不動、中興開山宥瓣寛文十二年【一、六七二】寂す、と記されている。【この寺跡に大杉神社】

「正福院」 【不動院野】

新義真言宗埼玉郡粕壁宿最勝院門徒、北林山と号す。本尊十一面観音、中興開山を弘栄と云、寛永十六年示寂す。と記されている。

「観音寺」 【不動院野】

新義真言宗埼玉郡粕壁宿最勝院門徒、開運山と号す。本尊観音。と記さ

れている。

「寶藏院」 【八丁目】

本山新義真言宗埼玉郡粕壁宿最勝院末、利生山と号す。本尊薬師、中興開山真寛元禄三年三月十五日寂す。と記されている。

「蓮花院」【牛島】

新義真言宗埼玉郡粕壁宿最勝院末、天女山と号す。本尊不動。と記されている。

「正福院」【樋堀】

新義真言宗埼玉郡糟壁宿最勝院の末、白雲山と号す。本尊阿弥陀。と記されている。【この寺跡に樋堀大師堂が安置されている。】